

# 「解釈者」をめぐるパース記号論の陥穽 ——教育学における記号論の応用とその困難から——

宮坂 朋彦（立教大学）

## 発表要旨：

パース（C. S. Peirce, 1839-1914）を重視する記号論の応用分野は多岐にわたるが、そのひとつに「教育」があることは、日本ではあまり知られていない。1980年代、教育心理学者を中心とする教育的記号論（educational semiotic, Cunningham 1987）が展開されて以降、その成果は2010年代に教育哲学者を中心とする教育記号論（Edusemiotics, Stables & Semetsky 2015）へ引き継がれ、2020年代に至るまで研究が継続されてきた。本発表は、これらの試みの足跡を辿ることによって、その構造的な問題を明らかにするとともに、今後の教育記号論の可能性を検討するものである。

教育的記号論と教育記号論に共通する基本指針は、パースにおけるセミオシス（semiosis）を「学習」と結びつけること、またそれによって、行動主義心理学や認知心理学に基づく学習論が陥っていた認識論的二元論を乗り越えることであった。しかし、近年の教育記号論における研究成果のいくつかには、教育学における認識論的二元論を批判しながら、実践的研究においては記号とその使用者という図式へと回帰してしまうという事態が看取される。明示的にせよそうでないにせよ、モリス（C. W. Morris, 1903-1979）に由来する「解釈者」（interpreter）としての認識主体が記号に先立って存在することを前提としている点において、記号論の教育学的応用は二元論的図式へ回帰するという陥穽を孕んでいた。

本発表は以下の構成をとる。まず、1970～80年代、記号論と教育学の双方でパース記号論が注目される土壌が醸成されていたことを示す。次に、パース記号論が当時の構成主義的学習論との接続によって教育学的に受容されていったことを明らかにする。さらに、教育的記号論と教育記号論に共通する課題として、「解釈項」（interpretant）ではなく「解釈者」（interpreter）がしばしば留保なしに使用されていることを指摘する。最後に、この問題に応答する糸口として、パースが「解釈者」を「擬似的な解釈者」（quasi-interpreter）として論じていたこと（CP 4.551）を指摘することにより、教育記号論が今後、取り組むべき課題を示す。

## 主要参考文献

- Peirce, C. S., 1931-58, *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce, 8 Vols.*, C. Hartshorne, P. Weiss & A. W. Burks ed., Belknap Press of Harvard University Press.
- Cunningham, D. J., 1987, "Outline of an Education Semiotic," *The American Journal of Semiotics*, 5(2):201-216.
- Stables, A. & I. Semetsky, 2015, *Edusemiotics: Semiotic Philosophy as Educational Foundation*, Routledge.